

「ホームズさん、薔薇はいかが？」

竹並 麻夕子

「ああ、何て退屈なんだ！」

ホームズは、心底うんざりしたように、新聞を放って寄りこした。今朝、届いたばかりのタイムズ紙である。

「僕の頭の中を、大きな蜘蛛が巣を張りそうだよ。奴ときたら、鼻歌を歌いながら、僕の立派な脳髓に糸をかけていくんだ」

鼻歌を歌いながら、巣を作る蜘蛛なんて聞いたこともない。それに、脳の中に張り巡らされる蜘蛛の巣なんて、ぞっとする眺めでもある。

「君の優秀な頭にも、カビがわくってわけかい？」

私はからかい半分に聞いた。そして左手を伸ばして、ホームズが投げてよこしたタイムズ紙を引き寄せる。そこに広がっていたのは、雑多で、大食漢の胃袋のようにあらゆるものがつめこまれたロンドンの縮図だった。外交上の取引のため、ドイツに赴いた特使、救貧院でのスト、辻馬車がぶつかりあい、怪我人が出たこと……あれこれのできごとが書きつづられていたものの、ホームズが食指を動かすに足るものはありそうになかった。

ホームズはいらいらと部屋の中を歩き回りながら、言った。

「僕の思考体系は、一点の曇りもなく磨き抜かれ、研ぎ澄まされていなければならぬんだ。たとえて言えば、狂うことのない時計の精密機械みたいなさ。そうすることで、僕は難事件を解決できるってわけだ。泥から、ダイヤモンドを拾ってみせるように鮮やかにね」

終りの方の言葉には、自分にうっとりしているのが感じられ、私はげんなりした。そうなのだ。シャーロック・ホームズと言えば、ストイックな孤高の名探偵、世の世評など我関せずと涼しい微笑を浮かべている男、とイメージが定まっているようだが（そのイメージは私がせつせと作りあげたのだ）、実のところ凄惨ナルシストである。

パイプをどの角度にくわえたら、一番さまになるかひそかに研究しているし、あの有名な鋭い猟犬のような容姿だって、一日に何度も鏡に映し、チェックしているのだ。細長い顔は青白く、若々しいが額の上あたりは後退しているのを気にして、怪しげな養毛剤を塗っているのを知っているのは、私だけの秘密だろう。

1 「そんなことを言っても仕方ないじゃないか。世界は君のために動いているわけじゃな

いし、何よりロンドンが平和なことはいいことだ」

ホームズはいらだたしげに、こちらを向いた。

「新聞に書いてないだけで、世には犯罪事件がはびこっているはずさ。それに、ここは世界じゅうで一番大きな魔都、ロンドンだもの」

そう言いながら、窓に近寄っていく。彼の履いている絹の部屋履きがペタペタと音を立てた。

「ほら、退屈で仕方ないのに、空までこの調子だ。今日で三日も雨が降り続けているよ」
窓の向こうには、鉛色の空の下に広がるロンドンの街が見えた。私のところからは見えないが、ホームズの目には、眼下の通りを行き交う黒いコウモリ傘の群れが見えているのだろう。

「まあ、仕方ないじゃないか。君の好きなヴァイオリンでも弾いたらどうだい？」

そう私が言った時だった。ドアの下の階段に足音が聞こえ、誰かがやってくる気配がした。とたんにホームズが、ドアの方を振り向いた。

「誰か来たようだよ、ワトスン」

そういうが早いか、部屋の真ん中のソファに座りこみ、そっくり返って見せた。まるで、犬が餌の入った器を指して飛んでいくようなすばやさだった。

間もなくドアが開いたが、それはハドスン夫人だった。ホームズの目につかりした落胆の色がよぎったが、夫人にはその訳はわからなかったろう。

「ホームズさん、お手紙です」

ハドスン夫人のたっぷり肉のついた体は、重たげに揺れ、胸は船の舳先のように突き出していた。彼女は、その胸をさらに突き上げるようにして、手紙をこちらに差し出した。

「何やら、良い香りもするし、上等な紙の封筒ですよ」

「ありがとうございます」

私は手を伸ばし、手紙を受け取った。ハドスン夫人は、ホームズの方をうっとりとした流し目で見やると、思い入れたっぷりにドアを閉めた。ああ、恐ろしい。この二重あごの、ブルドッグのような顔をした、おばさんはホームズに憧れているらしい。その証拠に、私とホームズが毎朝取る朝食のベーコンや卵料理は、ホームズの方が多めに盛りつけられているし、ロールパンなど私に一個、ホームズに二個というあからさまな差別待遇をやったのけたくらいだ。言っておくが、私もホームズと同じ額だけの部屋代を払っているのだ——おっと、こんな私怨などぶちまけている場合ではない。手紙だ、手紙。

私は、ハドスン夫人から受け取った手紙を、さらにホームズに渡した。

「なるほど、興味深い手紙らしいね」

ホームズは封筒を裏返して見せた。

「見たまえ、ワトスン君」

そこには、堂々たる紋章が印刷されていた。両脇から鹿が盾を持ち、その上には王冠が輝いている。

「貴族らしいね」

「おまけに、強い香水を紙の上にふりまいているらしい」

ホームズは、封筒を鼻先に持っていき、うえっというように眉をしかめてみせた。そして、封を切ると、中の手紙を読み始めたが、やれやれというように首をふった。

「見てみるよ。ずいぶん、勝手な言い草じゃないか」

私は、手紙をのぞきこんだ。ここにも、紋章が描かれ、細い糸のような文字がうねっていた。文字は、青いインクで書かれていたが、あまりにも細くうねうねと曲がりくねっているので、判別するのに目が痛くなるくらいだった。だが、そのことを別にすれば、手紙の文面は短く、素っ気ないといっていいほどだ。

「拝啓、シャーロック・ホームズ君。」

貴君の名声はよく聞きおよんでいる。複雑な謎を解き明かすことにかけては、ヨーロッパ中に並ぶ者はいない、とね。

現在、私も、困った状況に陥っている。だからこそ、君の助力をお願いする。ついては、今日、明日にでも、私の屋敷まで来てくれたまえ。迎えの馬車は寄こすつもりだ。

アーサー・シンクレア伯爵」

「特権階級の傲慢さ、極まれりという感じだね」

私は、少し憤慨していた。こんなことを言ったが、もともと私は、体制的な人間だ。

この世には生まれながらの身分というものがあると感じているし、貴族には憧れに近い気持ちを抱いてもいる。だが、このシンクレア伯爵という人物には、人を人とも思わない尊大さを感じられた。

「すまないが、ワトスン君。そこにある貴族年鑑をとってくれないかい？」

「わかったよ」

私は居間の奥にある、本棚まで行くと、思い革表紙の本を取ってきた。

「一九〇三年版とあるから、今年のものだな」

ホームズは、そういいながら頁を開いたが、その顔を見るとなかなか興味深い事実がわかったらしかった。

「これを読む限り、シンクレア伯爵は大変な金持ちらしいね。英国有数の資産家だ。一八八四年、スペンサー卿の娘、ジェイン嬢と結婚している。そして、古代エジプトマニアだそうだ。個人が持つ、エジプトコレクションに関しては、英国随一ともいわれている」

「古代エジプト？」

私は首をかしげた。前世紀の半ば以降から、かの国で発掘が進められ、今では貴族たちをも巻き込んで、ブームになりつつあるというのは聞いているが。

「あの、目張りをしたお面に、縞の頭巾がかぶさった、変てこなものかい？ 王様の棺からスフィンクスとかいう遺跡にいたるまで、同じ顔をしているじゃないか。それにピラミッドなんて、あんなばかでかいもの作って、どうしようという気だったんだらう？」

ホームズはニヤリと笑った。

「やれやれ、ワトスン君。君の言葉は、エジプト人と考古学者に対する冒瀆だよ。まあ、僕も、あんなもののどこがいいのかわからないけどね」

「ホームズ、わかったよ。シンクレア伯爵のコレクションが、盗まれたっていうんじゃないかい？」

「多分、そうだろう。古代の装飾品とか金細工が盗まれたっていう訳さ。……ふん、つまらんね。ミステリーの影さえない。そして、盗んだのは、使用人の一人とわかるっておちだ」

ホームズはつまらなそうに、手紙をテーブルの上に押しやった。そして、ベルを鳴らして、ハドスン夫人にお茶を持ってきてくれるよう、頼んだ。

だが、我々は間違っていた。この事件は、なかなか奇怪な味わいを見せる、珍事件へと発展していったのだ。事件の詳細を記したファイルは、後に鉄製の函に収められ、大切に保管されることとなる。そのファイルの封に、毒蛇コブラの紋章がぺたんこ押された姿で。

シンクレア卿は——伯爵と呼ぶべきなのかもしれないが、ここでは卿としよう——、ホームズの承諾を聞くや、すぐさま日時を指定してきた。「九月二十八日、土曜日、二時おいで乞う」——そして、その時間には、素晴らしい馬車がベーカー街の前にとまっているという案配だった。

「つまらん事件かもしれないが、ロンドン郊外へのドライブも悪くないじゃないか」

ホームズは、馬車の窓から首を突き出しながら言った。

「こうして見ると、ロンドンは実に、美しい街だね」

本当に、その通りだった。セント・ジエームス公園の木々は、紅葉しはじめていたが、その赤や黄に色づいた葉は、木漏れ日の中できらきらと輝いている。秋の風が、路上を吹きすぎていき、あたりの空気を透明にするかのようだった。大通りの敷石の上を、シンクレア家の馬車は進んでいったが、ガラガラと車輪が立てる音も、往来をゆく人々の話声も何もかもが心地よかった。

「シンクレア卿は、夫人との間に子供はいないそうだ。広大なハイポール城に、ひっそんで社交界にもあまり顔をださない変わり者だ」

ホームズは、窓の外に目を向けたままだ。その長い指を膝の上で、トントンと動かしながら（まるで、ピアノの鍵盤の具合を確かめる演奏家のように）、続ける。

「時々、考古学関係のサークルに参加したり、文章を寄稿するくらいのものだ。夫人との間も仲むつまじいとはいえないらしい」

「シンクレア卿は、幾つくらいだい？」

「四十二、三だろう。普通なら、男盛りという年齢なんだが」

馬車は、すでにロンドンの街中を抜けて、緑なす田園の中を走っていたが、やがて行く手に壮麗な門が見えてきた。黒い鉄製の門には、黄金の玉葱を思わせる装飾が上部にしつらえてあり、門柱は磨き抜かれた大理石だった。

だが、こんなのは序の口だった。やがて開けられた門から、敷地内に入りこんだ時、私は思わずポカンと口を開けてしまった。広大な田園がうねうねとどこまでも続き、鴨や水鳥が泳ぐ湖まで、姿をあらわしたのだ。田園の中には、馬車の走る道がまっすぐ伸び、その脇を小川が流れていた。小川の土手には、薄いピンクの花が咲き、柔らかな下草に覆われている。まるで、サリー州あたりの、緑なす田園に放りだされたみたいだった。

これが、本当に個人の邸宅なのであろうか？ 私が首をかしげた時、イチイの並木と、ガラス張りのあずまやが、前方に見えてきた。あずまやの中には、居心地のよさそうな籐椅子やテーブルがあり、クッションが並べられている。その前の灌木の茂みは、リスやウサギといった動物、三角錐などに刈り取られたトピアリーになっている。なじみ深い英国庭園だ。私は、ここがまぎれもない屋敷の一部であることを確認して、ほっとした。

そうして、さらに進むと、ハイポール城の陰気な灰色の建物が、出現した。

私たちをここまで連れてきた御者は、馬車を建物の入り口前に止めると、ドアを開けた。

「つきましたよ。ここがハイポール城です」

ホームズと私は、馬車から降りた。目の前には、伯爵の住むという城が威容を見せている。古色蒼然とした建物で、石の壁の間には、幾星霜もの時が流れたとわかる罅割れが走っていた。まるで、中世紀の荘園あとに建つ古城のようだ。玄関のドアは黒ずんだ樫の木でできており、その上にはシンクレア家の紋章が浮き彫りされていたが、それにも緑青がふきだしている。

屋敷の窓はぴかぴかに磨かれ、秋の日に光っていたものの、中の様子は暗い水面をのぞくようにはつきりしなかった。

想像していたよりも陰気臭い屋敷の外見や、これから会う変わり者の貴族のことを思い、私が思わず溜息をついた時、ドアが開き、執事らしい男が姿をあらわした。

「これは、ホームズ様にワトスン博士。どうぞ、お入りください」

男の顔は丸く、体も丸っこい。背の低い体に、仕たての良い服を着、胸ポケットからハンカチがのぞいているさまは、滑稽な喜劇役者を思わせた。彼はゆで卵を思わせる頭をふりながら、私たちの前に立って歩きはじめたが、その時になって彼が誰に似ているかわかった。ほら、あれだ。マザー・グースの童謡に出てくるハンプティ・ダンプティ

。私は思わず噴き出しそうになったが、ホームズはまじめくさった顔のまま、執事後につづいた。

邸内は、外観の陰鬱なさまからは信じられないほど、贅沢に、居心地良くしつらえられていた。磨かれた廊下やその上に敷かれたペルシア絨毯。長い廊下のところどころには、飾り台が置かれ、その上には豪華な花がいけられている。

「御主人さまは、屋敷の左翼で生活なさっておられるんです」

ハンプティ・ダンプティは私たちの方を振り返って言った。

「ハイポール城は、十六世紀に建てられた由緒あるものです。シンクレア伯爵家は、第一回十字軍の時代にさかのぼる、古い家柄ですが、薔薇戦争での戦功で、ヨーク公から、この領地を賜ったのです」

お前ら、下賤の者とは違うのだと言わんばかりの口ぶりだ。ハンプティ・ダンプティにとって、ホームズの偉大な才能も、大道芸人と変わりがなくくらいに見えるらしい。

先祖らしい肖像画がずらりと並ぶギャラリーや、中国の磁器や日本の伊万里が陳列された部屋を抜けて、私たちが辿り着いたのは、屋敷の西側の棟だった。そこに入った途端、今までの瀟洒な部屋々の雰囲気はかき消え、陰気臭い、灰色の壁が広がった。

「伯爵様。ホームズさんたちがお見えです」

執事が、廊下の手前の扉をノックした時、間髪いれず「入れ」と返事があった。

そして、その扉の向こうに広がったものを何といえよかかったらう？

昼間だというのに、カーテンが下ろされ、窓を背にして一人の男が机に向かっている。壁ぎわには、緑や赤や黒に彩色された人型の棺が立てかけてあり、耳の立った犬のような獣の頭に、人の体がついた異様な彫像が置かれていた。外にも気味の悪いものがごたごた置かれ、香辛料とカビの混じったような匂いが漂っている——さすがのホームズも、虚をつかれたらしい。

灰色の瞳が呆然と見開かれたが、次の瞬間には、鋭いきらめきが宿った。まるで、獲物を嗅ぎつけた猟犬が、鼻をうごめかすように。

「これは、ホームズ君」

男が立ちあがった。

「よく来てくれた。礼を言う」

男——シンクレア卿も、部屋に劣らず変わっていた。そう背は高くはないが、細身でノールな顔立ち。気品が感じられるといえいいのかもしれないが、私は彼から、不健康な嫌な印象を受けた。女性的な細い指や、青白い皮膚。それは、なぜか巢にうずくまった蜘蛛を連想させたのだ。

「手紙を受け取りましたが、事件の内容についてはおっしゃらないままでしたね」

ホームズは、シンクレア卿の前に立ったまま言った。

「さっそくですが、何が起こったのか話してくれませんか？ 僕も忙しい体ですし、人生は短いんです」

シンクレア卿の薄い唇に、ちらりと微笑が走った。

「君の言う通りだ、ホームズ君。これを見てくれたまえ」

彼は立ち上がると、隣の部屋へのドアを開けた。壁に小さなドアがあり、隣へ通じるようになっていているらしい。

我々も続いたが、その部屋も同じように白いカーテンで光をさえぎられ、薄暗い。そして、部屋のまんなかには、等身大の木箱が置かれている。だが、それをのぞきこんで、私は啞然とした。そこに横たわっていたのは、干からびたミイラだったのだ。

「なるほど、ミイラですか」

ホームズの落ち着いた声が聞こえた。

「僕の知識は偏っていて、歴史関係はからきしだめなんです、数千年は前のものですね。そんな前のものとしたら、保存状況はとも良いと思います」

「こんなミイラができあがるには、砂漠地方の乾燥した空気と、内臓をすべて取り去るといった丁寧な処理が必要なのだ」

言いながらシンクレア卿は、ミイラを指さした。

「見たまえ。このミイラに何が欠けているかを」

ホームズと私は、木箱をのぞきこんだ。ホームズは果敢に、私はこわこわと。

ミイラは骨に皮膚の残骸がはりつき、魚の標本のように平べったい胸から下には、リンネルの包帯が巻きついていて、唇のない口からは歯が大きく飛びでて、皮膚は朽ちかけた羊皮紙のようだったが、かつての面立ちをとどめている。

「左手の手首から先がありませんね」

ホームズが断言した。

「手首の骨がすばっと切断されています。もちろん、誰かが切り落としたものでしょう」「そうに違いない」

貴族は、手を伸ばしてミイラにふれた。

「私は、このミイラを王家の谷で発掘していた考古学者から手にいれたんだ。彼の言葉によると、有名なファラオの墓の入り口から少し離れた、見過ごすような小さな墓から発見されたそうだ。墓荒らしがとくに略奪してしまっていて、あったのは、ミイラだけだそうだが、やはり王族の一人に違いないだろうとも言っていた……ホームズ君、古代はロマンだよ。我々の存在など、時間という絶対者から見れば、無力なあやつり人形にすぎないが、それでも過去の文明に触れると、『久遠』とは何かがわかってくる」

「あなたはお幸せですね、シンクレア卿」

ホームズの言葉には、やや辛辣な響きがあった。

「どうやら、この西翼の建物全体を、古代エジプト関係のギャラリーにされているようですが」

「その通りだ。ここには、ミイラを置いてあるだけだが、向こうの部屋には、古代の女性たちが身に着けていたアクセサリーや宝飾品、黄金のサンダルなども展示している。死者の内臓をしまっていたカノプスという容器も集めているくらいだ。……私は、ここに古代エジプトを再現した空間をつくりたいのさ」

「それで、宝飾品には、手をつけられていないんですか？」

ホームズが聞き、私ははっとした。そうだ、強盗はなぜミイラの手など盗んでいったのだろうか？ もっと貴重な、売り飛ばせば、おそらく天文学的數字にのぼるだろう宝があるというのに。

「そうだ。ラピスラズリを埋め込んだ額飾りも、黄金のネックレスもみな無事だった。でも、私としたら、芸術品より、このミイラの方に愛着があるんでね」

シンクレア卿は、ミイラの胸をピタピタと撫でながら言った。その胸は、ぼろのように張り付いた皮膚もおおかた欠けていて、洞穴のような内部が見えている。青白い顔をした貴族が、ミイラを撫でまわすさまは、ぞっとするような迫力があつた。

「僕のみるところ、そのミイラは女性のようですね」

シンクレア卿の奇怪な仕草に、びくともしないらしいホームズが言った。

「僕は、若い頃趣味で、人類学をやっていたことがあります。このミイラの骨格の形は女性のものだと思います」

「その通りだ。生きていた頃は、かなりの美人だったろう」

いくら美女だったと言っても、ミイラになってしまつては仕方がないではないか。このぼろきれに比べたら、干からびたドライフラワーの方がずっとましだ——私はそう言いたかったが、黙っていた。

「それでは、シンクレア卿。あなたは、エジプトへ何度も行かれて、発掘隊に参加したこともありませんか？」

「エジプトへなど、行くものか」

貴族はとんでもないといわんばかりに、手を振った。

「あんなところへ行つては、どんな病気にかかるかわかったものじゃない。不衛生な水、埃っぽい空気——この間も、物見遊山で行った若い貴族が、敗血症にかかって死んだというじゃないか。ごめんだね」

「じゃあ、安全なイギリスの、素晴らしい邸宅の中でだけエジプトを楽しまれているわけですね」

ホームズの明らかな皮肉に、シンクレア卿もむっとしたらしかったが、口には出さなかつた。

「このエジプト・コレクションの管理は、ジョン・ラムジーという青年にまかせている。彼が陳列品やファイルを整理したり、部屋の掃除係を監視している訳だ。数日に一度、女中たちに、掃除をさせているのですね。部屋や陳列ケースの鍵を持っているのは、私とラムジーだけだ」

「そのラムジー青年に会ってみたいのですが」

「彼は今日は休みだ。今週中は、来ないそうだから、君が彼の家まで行ったらどうかね？」

「ええ、そうすることにします」

数日後、調査の結果を報告することにして、私たちはアーサー・シンクレア卿の前を辞去することにした。別れ際、シンクレア卿は謎めいた感じのする微笑を浮かべて、ホームズに言った。

「君も私と同じように、ラムジーを怪しいと思っているかね？」

ホームズは答えなかったが、黒い山犬（アヌビスという古代エジプトの神だそうだ）の頭を持った神像の傍らに立って、こちらを見ていたシンクレア卿の姿は長く心に残つた。

「あのシンクレア卿をどう思った？」

卿の部屋を出た後、私はさっそくホームズに問いかけた。

「確かに変わった男だね。好感を持てるとは言えないが、一種の魅力がある」

私はさきほど会ったシンクレア卿の印象を、頭の中でまとめようとしたが、得た結論はホームズと同じものだった。

西翼から本館へ戻り、玄関ホールまで出た時、私は傍らのフランス窓が開くのを見た。入ってきたのは、一人の女性だった。

その女性を見た時、美しい令嬢だと思い、一瞬どきどきしたが、次の瞬間何か妙な感じに打たれた。彼女は、小柄な体に白いギリシア風のチュチュをまとい、髪をちぢらせ、さらに上でまとめ上げるといふ凝った髪型にしていた。顔は小さな卵形で、カメオ

の浮き彫りのように優しい。

だが、その乙女然とした姿が、何だか不自然に見えた。まるで大人が子供の格好をしているみたいに。

女性は私たちのとまどいに気づかないらしく、微笑みながら近づいてきた。

「こんにちは。ホームズさんにワトスンさんですね。わたくし、ジェイン・シンクレアです」

それでは、これがシンクレア卿夫人か。それにしても夫とは、相当年が離れているらしい。

「わたくし、ホームズさんのファンで、ワトスンさんが書かれた事件簿は皆よんでいます。……せっかくおいでになったんですから、一緒にお茶でも飲んで下さいな」

レディの言葉などに、逆らえない。ホームズは、と見ると、不思議なものでも見るような顔でレディ・ジェインを見ている。

「こちらが、温室になっていますの。そこで、お茶をいかがかしら？」

少々強引なシンクレア卿夫人の後について、私たちはフランス窓から外に出た。そこは、芝生の敷かれた広い中庭になっていて、真ん中にガラス張りの大きな温室がある。レディ・ジェインは、私たちを温室にいざなった。

その温室の中へ入って見て、私は思わずはっとした。いたるところに、薔薇が咲いていて、赤やピンク、白、の花々がむせるような芳香を漂わせていたのだ。薔薇のアーチが中央にしつらえられ、そのほのぐらい影さすトンネルをくぐったら、どこか妖精の国へでも迷い込んでしまいそうな気がする。

ひととき大輪の薔薇が咲いている茂みの前には、テーブルと椅子があったが、なぜかすでに紅茶ポットやらティーカップが置いてある。

「さあ、お座りになって」

仕方がない。ホームズと私は、夫人の向かいに座ることにした。

「紅茶は、フォートナム・メイソンのものですけど、そこに薔薇のリキュールをたらしめました。なかなか美味しいと思いますわ」

私は、こわごわ、ティーカップを口に運んだが、薔薇の濃厚な香りが流れこんできて、閉口した。こんな妙なものが、紅茶などといえるのだろうか？ ホームズはすました調子で、お茶を飲んでいたが、やがて夫人の方を意味ありげに見た。

「シンクレア卿夫人。どうやら、僕に何か聞きたいことでもあるんじゃないかと思いませんが？」

「ええ、そうなの」

夫人は、子供っぽく首をかしげてみせた。

「夫は、アーサーはあなたに、何を依頼なさったのかしら？ わたくしが聞いても教え

てくれませんか」

「失礼ですが、依頼人の秘密は守る義務がありますんでね。ただ、アーサー卿の命にかかわるような重大事件になりそうにない、ということだけは申し上げておきましょう」

その時、メイドが銀の盆を持ってきて、菓子皿をテーブルの上に置いた。丸いクッキーにジャムがそえられていたが、呆れたことにこのジャムも薔薇だった。

「紅茶やジャムに使われている薔薇ですが、この温室のものですか？」

私は聞いたが、考えてみれば当たり前のことだった。

「ええ。私は薔薇が大好きなの。知っておられるでしょう？ 古代から続く薔薇水の療法を。わたくし、朝起きて使う化粧水からはじまって、体をマッサージするクリーム、食後に飲む丸薬まで、すべて薔薇を使っていますの。この温室内の薔薇園も、そのためにつくったんです」

「なかなか興味深い美容法そうですね」

ホームズの口調には、ちくりとした皮肉があったが、夫人は気づかないらしかった。

「薔薇は、古代ギリシアの昔から、永遠の青春のシンボルでした。わたくし、薔薇の精油を使った、マッサージを毎日一時間、全身にしてもらっています。……おかげで、ごらんのとおりです」

そう言って、クリーム色のすべすべした腕を見せた。

その時、どうしたことから、ホームズが「ハックション」と大きなくしゃみをしてみせた。

続けざまに「ハックション、ハックション」とやってみせる。

「おい、ホームズ。どうしたんだ？」

「すまない。どうやら、僕は薔薇に弱いらしいよ。鼻がムズムズするんだ」

もっと、後の時代だったら、ホームズの症状にアレルギーとか何とかの立派な名前がつくのだろうが、今は一九〇三年だ。だから、私はこう言ったにすぎない。

「へえ、君にも弱いものがあるうとはね」

「まあ、ホームズさん。大丈夫ですかしら？」

レディ・ジェインの白蛇みたいな腕がホームズの腕にからみついた。そして、手をホームズのがっしりした手の上にそっと這わせる。とたんに、ホームズの体が静電気でも走ったかのように、びくっとした。顔がぎこちなくこわばり、唇がひきつったように、歪んだ。

まずいな、と私は思った。ホームズは女嫌いのポーズをとって見せたりなどしているが、本当のところは女性恐怖症なのだ。女性には紳士的だが、やや冷たいイメージを私が、本などに書いているせいで、誤解が広まり、かえって女性ファンを増やしたりなどしているのだが、実の所、女性に触れることさえできない。

「この薔薇のリキュール入りの紅茶をお飲みになったんですから、薔薇嫌いなどなくなってしまうすわ。さあ、大丈夫」

夫人は、ホームズの手をぎゅっと握りしめた。哀れなホームズは、鏡に向かうガマガエルみたいに、冷や汗をたらたらこぼしていた。そして、何とか夫人の手をふりほどこうとしているらしい。

私は、見るにしのびなくなると夫人に聞いた。

「シンクレア卿は、立派なエジプトコレクションをお持ちだそうですね」

「ええ。それしか、趣味はありませんから」

「古代の王妃や王女が、使ったという素晴らしい装飾品を身につけてみたいと思われませんか？」

「女性なら、誰でもそう思うんじゃないませんか？」

夫人はにっこり、微笑した。

その時、ホームズには願ってもない、救いの手が現れた。温室の入り口から、一人の紳士が入って来て、夫人は「まあ」という言葉と共に、立ちあがって出迎えたのだ。

「ようこそ、ガードナー博士」

私たちの前に立ったのは、がっしりとした体つきの、岩のような傲岸な顔つきをした男だった。年齢は五十くらいだろう。

「こちらは、医学博士の、リチャード・ガードナー氏です。わたくしの主治医でもあります。ガードナー博士、こちらはあの名探偵ホームズさんに、助手のワトスンさんですわ」

「御高名はうかがってますよ、ホームズさん」

ガードナー博士は、愛想良く笑いながら、ホームズに手を差しだした。だが、その目は笑ってなどいず、冷たい猜疑の光が宿っているように感じたのは、私の思い違いだろうか？ 私にとっては同業者だが、こんな屋敷に出入りしていることといい、ずいぶん羽振りがいいようだ。ハーレー街あたりにも、診療所を持っている金持ち相手の医師だろう。

ホームズは、ガードナー博士と握手すると、「それでは」と立ちあがった。

「失礼させていただきます。御主人から頼まれた、事件の捜査にあたらねばならないので。じゃあ、ワトスン、行こうじゃないか」

温室を出て、少したって振り返ってみると、シンクレア卿夫人の頭がガードナー博士の肩の上になだれかかっているのが見え、私はあわてて目をそらした。

ベーカー街の部屋に戻ると、ホームズはどさっと、ソファに座りこみながら言った。

「強盗は、古代の芸術作品や、アクセサリーになど目もくれず、ミイラに手をつけただけだ。それも、手だけを盗むなんて、どういう訳だろう？」

「そんなこと、僕にもわかる訳ないじゃないか。……ひよっとしたら、最初からミイラには、手が欠けていたのに、シンクレア卿が思い違いしてるんじゃないかい？」

「いや、それはない」

ホームズが首を振った。

「彼は、あのミイラに大変愛着を持っているらしい。日夜眺めているミイラのちょっとした変化でも見過ごすはずないよ——それにしても、変わった夫婦だね」

「えっ？」

「アーサー・シンクレア卿とレディ・ジェインさ。夫の方は、古代エジプトに取りつかれ、屋敷の一部を古代の神殿みたくにして、陰気臭く生活している。夫人の方は、若返りの美容に凝っているという始末だ」

「そのことなんだが、シンクレア卿と夫人の年は大分離れているみたいだね。夫人ときたら、まるでまだ娘といってもいい年頃じゃないか」

それを聞いた時、ホームズの目が大きく見開かれ、次の瞬間、「アハハ」とのけぞって笑いだした。おかしくて、おかしくてならないというように、笑い声はひとときしり続いたが、やがてこんなことを言っただけのけだ。

「君、レディ・ジェインを幾つだと思う。四十一歳だぜ。貴族年鑑を二人で見た時、一八八四年結婚したって、書いてあったじゃないか」

「あっ……」

私は、思わず口を手で押さえたが、それにしてもあのシンクレア卿夫人が……。

「とても、信じられないな。白いドレス着て、出てきたところなんて、若い女性のように見えたよ」

「それは、君が女性というものに麗しい幻想を抱いているからさ」

すっかり、自信を取り戻したらしいホームズは、手を顔の前で優雅に組みあわせてみせた。

「僕には、夫人の実際の年齢が、肌を見ただけですぐわかったよ。どんなに若づくりして、うまく化けたつもりでも、皮膚を見ると、一目了然さ。動物だって、毛並を見ると、若いのか年とっているのかわかるじゃないか」

夫人に触られた時、へどもどしていたくせに、何を言ってやがる。すましこんでいるホームズに一発お見舞いしてやりたかったが、私はどうもホームズに強いことが言えないのだ。あちらは、私のことを「君が鈍いせいで、君と話しているとかえって、事件の道筋がわかるのだ。まるで、夜道を照らす松明みたいだね」などと、言いたい放題だと

いうのに。

それに、今言われてみると、確かに夫人から不自然な印象を受けたことは否めない。まるで、大人がわざと少女の格好をしてみせているみたいに。それに、温室に入った時だって、じかに日光のふりそぐ真ん中でなく、薔薇の茂みの陰に隠れるような場所に、チェアをずらしていなかったか。

「そう言われてみれば、思いあたることもあるな。……でも、あの医者はどういうことだろう？　かなり親しいみたいだったが夫人は、どこか悪いのかな？」

「悪いのは、若い女性のように振る舞ってみせる頭の具合だといいたいがね。まあ、どっちにしる、リチャード・ガードナーは内科医でも外科医でもない。彼が専門とするのは、美容医学というやつさ」

「何だ、そりゃ？」

「君のような真面目な、町医者には想像もつかないだろうが、若くありたい、美しくありたいと望む社交界の女性たちに、絶大な需要があるのさ。てっとりばやく言えば、怪しげな成分の入った注射を御婦人連にして見せたり、栄養クリームを肌にしりこませたりするんだよ」

「それじゃ、医者なんていえないよ」

「君はそう言うだろうね、ワトスン。大体、僕がリチャード・ガードナーなんていう男のことを知っているのは、彼が別件の事件にもかかわっているからさ。裕福な未亡人K夫人がある朝、二目と見られない爛れた顔の死体になって発見された。まるで、濃硫酸をかけたみたいだね。僕は、夫人が使っていた美容クリームが怪しいと睨んでいるんだが、その化粧品が夫人の家からは見つからなかった。証拠がないという訳さ。そして、そのクリームを処方したのは、ガードナー医学博士なんだ」

「何て悪い奴なんだ。そんな男はすぐ捕まえる必要があるよ」

そして、私はシンクレア卿夫人とガードナー博士の怪しげな振る舞いについて話した。温室の花の陰で、男の肩にもたれかかる伯爵夫人の姿――。

「なかなか興味深いね。でも、僕に言わせれば、よくあることだよ。貴族の夫人とお抱えの医者 of 浮気沙汰なんていうのはね」

ホームズは面白くもなさそうに、口を歪めてみせた。不思議に思うのだが、以前私が「緋色の研究」や多くの冒険で描いてみせた、この推理の芸術家、合理主義の結晶のような男がなぜ、殺人事件や盗難事件などという極めて人間臭い仕事にかかわることになったのだろうか？　ホームズという人間には顕微鏡をのぞきこんだり、訳のわからぬ化学実験をしたり、その合間にヴァイオリンをギーギー弾きならしてみせるという、浮世離れした生活こそふさわしいのに。

「シンクレア夫妻のことは、いったん取りのけて、だ。僕たちは夕食でも取ろうじゃない

いか。朝、出かける時、ハドスン夫人が騒いでいたじゃないか。今晚の食事は、夫人お得意のシエパーズパイとヨークシャープディングだから、絶対外で食べてくれるなつてや」

ホームズは、笑って立ち上がると、窓辺のランプに灯をともした。ロンドンの夕闇が、開け放した窓から忍びこんできて、彼の長い影も床にのびていた。

さつそく、ホームズは調査にとりかかりはじめた。古代エジプトを研究するというサークルから、シンクレア卿の評判を聞き、シンクレア邸で働く使用人たちについても調べているらしい。

シンクレア卿に会った翌々日のことだったと思う。その朝、ホームズはベッドから飛び起きるや、私に言った。

「ワトスン、今日はジョン・ラムジーに会いにいくぞ。さあ、すぐ出かけよう」

私はあわてて着替えをすませると、ホームズの後に続いた。

「ジョン・ラムジーはどこに住んでいるんだい？」

ホームズが辻馬車を捕まえる様子もないのを見て、私は聞いた。

「ああ、それが驚くじゃないか。このベーカー街から数百メートルも離れていないボンドストリートなのさ。我らが親愛なるラムジー君は、高級とまではいかないが安っぽくもない、手ごろな下宿で研究生活にふけているらしい」

ボンドストリートもはしっここの、イエローブラウン色の建物の二階にラムジーは住んでいた。ドアの外の呼び鈴を押すと、奥でパタパタ音が聞こえ、やがてそばかすだらけの顔がのぞいた。

「誰ですか？」

青年は、顔色が悪く、もつれた赤毛が額の上に垂れているせいか、灰色がかって見えるほどだった。

「君は、ジョン・ラムジー君ですね？」

「ええ。そうですが」

「君が働いているシンクレア伯爵のところ、ミイラの手が盗まれた事件について聞きたいのです」

とたんに、ラムジーの顔色は一段と土気色になったようだった。緑がかった目が、怯えのため、大きくなる。

「そんな……僕、何も知りません。無関係です」

そして、ドアを急いで閉めようとしたが、ホームズの手が、ドアの端をしっかりとつかんでいた。

「それは、君ではなく僕が決めることです」

ラムジールはいよいよやながら、私たちを中へ通さなくてはならなくなった。部屋の中は、北向きのせい、日当たりは良くなさそうだったが、まずまず快適にしつらえられている。壁の一面を大きな本棚が占め、中には古代エジプト関係の書籍、資料が埋めつくされているらしい。窓際の机の上には、ファイルがごたごたと積まれ、エジプトの女神を模したらしい胸像も置かれている。

「じゃあ、そこらへんの椅子にでも座って下さい」

私たちは言われた通り、部屋の片隅に置かれた安楽椅子にこしかけた。ホームズが得意技を披露したのは、この時だ。

「ラムジール君、君はこの一年以内にエジプトへ行ったね。そして、君はウェールズ地方かその近くの出身じゃないかい？　そしてお父さんは牧師だろうか？」

これを聞いた時の、ラムジールの表情といたらみものだった。ぽかんと口を開け、眉をつりあげ、一瞬何が起こったのか信じられないというようだった。

「どうやら、当たったようだね」

ホームズは、いたずらっぽく微笑した。

「えっ、ええ……。でも、驚いたな。どうして、わかったんです？」

「種明かしすれば、簡単さ。まず、君は勉強机の椅子に服をたてかけている。ここからでもはつきり見えるが、衣服は長い寝巻を思わせるもので、開いた胸元には、エキゾチックな刺繍がどこかされている。これは、エジプトの庶民の間に広く着用されているもので、ガラベアヤという民族衣装だ。君はそれを部屋着に使っているらしいが、まだ衣服は新しく傷んでいない。だから、君がこのガラベアヤをエジプトから持ち帰ったのは、ごく最近のことらしいと思ったわけだ」

「その通りです」

すっかり、ホームズの術中にはまったらしいラムジールは、がくがく首を上下に振ってみせた。

「僕は、七、八カ月ほど前、エジプトから帰ってきたんです。それで、考古学協会のサークルからの推薦で、シンクレア伯爵のもとで働くようになったという訳でした」

「じゃあ、シンクレア卿とは長いつきあいという訳でもないんだね」

「ええ……。あの、それで僕がウェールズ地方の出身ということや、父が牧師だということなんてどうしてわかったんですか？」

「やあ、それは君の発音を聞けば一目瞭然さ。大体ウェールズというのは古い地方で、住民は英語とは違うゲール語を話して来た。どうして、そうなのか言語学的にもたいそう興味のある問題だがね。君は、きれいな英語を話す。それでも、かすかに耳慣れないアクセントが感じられる。僕は、英国の方言やアクセントの違いについては調べたこと

があるんだが、そのことから押して、君をあのあたりの出身じゃないかと思ったわけさ。君が牧師の家庭で育ったんじゃないかというのは、牧師がきちんとした英語を使うことと、本棚に立てかけられた聖書がよく使いこまれているようだったからだよ」

「素晴らしい、実に素晴らしいです。世の中に、あなたのような人がいるとは思っていませんでした」

どうやら、ラムジューはシャーロック・ホームズのような有名な名人も知らないらしかった。部屋にこもりつきりで、研究にいそしむ世俗に疎い人種の一人なのだろう。今や、目を輝かせて、尊敬のまなざしで自分を見ているラムジューの姿を、ホームズは満足そうに見やり、パイプを取りだした。やれやれ、ホームズのナルシズムが満足されたらしい。今わかったが、こういう称賛がじかに聞きたくて、ホームズは殺人や痴情のからむ事件に首をつっこむのじゃなかるうか？

「聞きたいのだが、君が最後に見た時、ミイラの手はもうなかったかい？」

ホームズの問いに、青年はきっぱり答えた。

「はい。僕が六日前、見た時はもうありませんでした」

「六日前か——」

ホームズは独り言のようにつぶやいた。

「シンクレア卿から最初に手紙が来たのは、五日前だったね。彼は盗難に気づくや、すぐ僕に連絡を取ったことになる。だが、警察には届けなかったのだろうか？」

「シンクレア卿は警察がお嫌いなんです。やつらの汚らしい足跡が、ハイポール城に踏みいってくるなんて、とても我慢ならんと言っておられました」

「あの男なら、それくらいのことはいそいだね」

ホームズは微笑し、続けた。

「君は、個人的にシンクレア卿をどう思うね？」

「えっ、ええ。変わった人だと思います。あらゆる手を使って、エジプトの美術品を手元を集めようとしているんです。ミイラだって、以前から興味はおありになったんですが、完全ではないとか、ミイラの骨格がよくないとか言って、なかなか買い取ろうとしませんでした。あの、王族の女性とかいうミイラは、一目見たとたん、とても気に入られて、法外な値段で手にいれたとかいってました」

「ミイラに随分、御執心なんだね」

「はい。卿は、エジプト館と名付けたギャラリーで生活しておられて、寝起きもそこでしているくらいなんです。夜寝る前には、ミイラが安置されている部屋に入って、長い時間を過ごされています。まるで、恋人に会いにくみたいに」

「それは、レディ・ジェインにとっては面白くないだろう？」

「当たり前ですよ。大体、信じられません、あんなに綺麗な夫人がおられると言うのに

「——」
見ると、ラムジ―は顔を真っ赤にさせている。どうやら、レディ・ジェインにひとかたならぬ好意を持っているらしい。こんなうぶな青年は、あの薔薇に包まれて生きていくようなシンクレア卿夫人に、手もなくやられて、熱烈な信奉者になってしまうのだから。

「それで、だ」

不意にホームズの声音が、がらりと変わった。

「君は、さっき考古学協会のサークルの推薦で、シンクレア卿のところまで働くようになったと言ったが、それは嘘だね？」

「えっ？」

これには、ラムジ―ばかりでなく私も驚いた。ホームズは何を言おうとしているのだろうか？

「第一、君は最初から、協会にシンクレア卿のもとで働かせてくれるよう、頼んだ。推薦状を書いてくれるようにね。——駄目だよ、否定しようとしたって。僕は協会に足を運んで、聞きだしたんだ。君は、エジプトでは名高い考古学者の助手をしていたらしいね。その結構な仕事を、どうして棒に振ってイギリスに帰国し、貴族の屋敷に行くことになったんだい？」

ラムジ―は黙ったままだった。その瞳には怯えと同時に、かたくなな意固地さがあった。

「それで、僕はさらに調べたんだが、君はエジプトにいた時、向こうの青年たちと親しくなったそうだね。古代エジプトの女神イシス信仰を標榜する団体で、秘密結社を気取っていたらしい。ほら、君の机の上にも、その団体が主張を書きつらねているらしいパンフレットが見える。思想らしいものはほとんどなくて、自分達の国の貴重な文化遺産が外国に持ち去られているのに、激しい怒りをぶちまけているだけの手合いの団体だね」

部屋の空気が固く、張り詰めたものになったのが感じられた。私は立ち上がると、窓際に置かれたラムジ―の机のところまで行ってみた。ぶあつい資料が積まれた横には、確かに、古代エジプトの神像を印刷した、ペラペラのパンフレットらしきものがある。蛇ののたうったような妙な文字も書かれていたが、これはアラビア文字に違いない。それにしても、ホームズはいつ、このパンフレットに気づいたのだろうか？ まるで千里眼じゃないか。

「僕は、僕たちのやり方が間違ってると思ったんです」

ラムジ―はようやく小さな声で、囁くように言った。

「イギリスや外の国々が、ずかずかエジプトに乗りこんで、あちこちを掘り返し、めぼ

しい宝は自分達の国に持ち帰ってしまう。本来の所有者であるはずの、エジプトには壺の破片だって、わけてやろうとしない。そんなの、おかしいじゃないですか？」

「それは、君が健全な感覚の持ち主だということだよ」

「だから、シンクレア卿のもとで働きたかったんです。英国一のコレクターである卿に働きかけて、幾つかでもいいから美術品をエジプトへ返してもらおうように」

「そうかな？」

ホームズの目にかからかうような色が浮かんだ。

「君があちらにいた時、過激派の青年たちと地元の酒場で、話をしているところを見た者がいる。そんな君の姿は、同国人の目には、きわめて危ないものに映ったようだ。伯爵にエジプトの秘宝を返してくれるよう、訴えるだって……ふん、それはきれいな事にすぎないかい？」

「でも、僕はそう信じてたんです。シンクレア卿だって、エキセントリックだけど、悪人ではありません。だから、卿に話す機会をうかがっていたんです」

「君は秘密結社と連絡を取り合って、伯爵家の財宝を盗み出そうと謀ったんじゃないかね？ その手始めに、伯爵に対する嫌がらせとして、ミイラの手を取り去った」

「僕は、そんなことしません！」

悲鳴のような声がほとばしった。

「大体、僕は考古学者じゃないですか。発見された古代の品が、どんなに重要で素晴らしいものであるか、よく知っています。そんな人間が、発掘されたものを傷つけようとなどするでしょうか？」

「その通りだ」

ホームズはにこりと笑うと、ラムジীর肩をたたいた。

「ミイラの手を盗んだのは、君ではない。話してみても、よくわかったよ。ラムジীর君が真面目で、世間智などというものを持ちあわせていない学究だとね。だから、忠告しておく。怪しげな秘密結社とは、すっぱり縁を切るんだ。君は、善意だけのつもりかもしれないが、彼らはやがて君をたらしこみ、シンクレア卿のコレクションを盗み出す手助けをさせたに違いないのだから」

「はっ、……はい」

ラムジীরは、吸いつけられたように、ホームズを見やりながら、何度もうなずいた。細いストライプのシャツからのぞいた手が、小刻みに震えている。

「じゃあ、僕らは退散させていただく。ワトスン、行こうじゃないか」

我々は立ち上がり、居心地の良い巢のようなラムジীরの下宿を出て行った。

外の路上に出た後も、しばらくホームズは黙ったままだった。花売りの娘が近寄って来て、アスターの花束を差し出した時も、薄汚い乞食が足元で哀れな声をあげた時も、それらのものがまるで、目に入っていないようだった。

プラタナスの街路樹が張りだした、石畳の道をこつこつと足音を響かせながら、まっすぐ歩いて行く。

「おい、ホームズ」

私はついに、我慢できなくなって叫んだ。

「君は、この事件の詳細がわかっているのかい？ 僕は、犯人はラムジーだとばかり思ってたんだが」

「ああ、ワトスン君」

ホームズは夢からさめたような、目つきになって言った。

「そうだ。僕も考古学サークルに行つて、話を聞いた時は、ラムジーに疑いを抱いていた。だが、彼に会つて、そんな疑惑など霧のように消えちまったよ。いいかい、ジョン・ラムジーという青年はだね、被害者にはなっても、加害者にはなれないたちの人間なさ。ウェールズの純朴な牧師の息子そのままだね」

「じゃあ、誰が——」

「おいおい、ワトスン」

ホームズは皮肉っぽく、唇をつりあげてみた。

「ラムジーでないといつたら、後は決まってるじゃないか」

「えっ、犯人がわかつてるのか？」

「だが、その人物が犯行に走つた理由が、わかりそうでわからないんだ……あつ、ちょっと待てよ」

突然、ホームズが立ちどまった。そして、目の前の、新聞売りスタンドへ駆けこんでいく。

スタンドには、デイリー・ガセット紙やテレグラフ紙はじめ、幾種類もの大衆紙が並んでいたが、ホームズは迷わずそのうちの一枚を取りだした。新聞売りに金を渡した後、路上に立ちつくしたまま、第一面を食いいるように見ていたかと思うと、いきなりこちらを向いた。鋭い灰色の瞳が燃えるようにきらめき、興奮のため青白い頬にも血がのぼっている。

「見てくれたまえ、ワトスン。この記事のところだ」

私は差し込まれた新聞に目を走らせた。それは、ロンドンのあるとあらゆる事件を面白おかしく書きたてた、新聞というより回覧板とでもいうべき代物だったが、その右下の欄に大きく煽情的に書かれた記事があった。

「ミイラ、薬になる」との派手々しいタイトルの下に記されたのは、以下のようなもの

だった。

「我らが英国の貴族や著名人を巻き込んで、フィーバーを巻き起こしている古代エジプトの発掘。かの地の砂漠から掘り起こされた、黄金細工や不可思議なマスクは人々を魅了してやまぬものだが、中でも、ミイラと呼ばれる王達の遺体は、センサーシヨナルだ。これは、数千年の昔、亡くなったファラオの遺体を、苛性ソーダやナトロンに漬けた後、内臓を取りだし、丹念に防腐処理をしてつくりだされたものだという。ミイラは包帯でグルグル巻きにされた後、人型を模した棺の中に入れられたが、最近、これに素晴らしい医薬効果があると、幾人もの医学者が述べはじめているのだ。D 大学医学部教授、ラングストーン氏は、こう語る――『ミイラは、想像しがたいほど長い時を、原形をとどめたまま保存されてきたタイムカプセルだ。この奇跡的な産物には、それだけで霊薬にも匹敵するものがあるはずだと、私は信じる。寿命を伸ばし、病を癒すなど、あらゆる効果が期待されるだろう』。ミイラは、すりつぶし、粉薬にして飲むと、素晴らしいという。あなたも、ミイラを毎朝のお茶に入れて、飲んでみませんか？」

私は、ごくりと唾を飲みこんだ。

「信じられないことがあるもんだな、ホームズ。でも、じゃあ、犯人は――」

「その先は、まだ言わないでくれたまえ」

ホームズは微笑すると、さっさと歩きはじめた。そして、ベーカー街の部屋に辿り着くと、電報を打つよう手配したらしい。

その晩、我らが友、シャーロック・ホームズは化粧着のガウンをはおったまま、室内を落ち着かなげに歩き回っていた。柔らかな照明が彼の顔に深い陰影を落とし、一層思索的に見せている。まだ秋とはいえ、火が恋しいような、ひんやりとした冷たさが肌に感じられる夜だった。

カーテンを開け放した窓の外には、ガス灯に照らされた、淋しい闇が広がっているばかりだ。

私は、暖炉の方を未練がましく見やりながら、ホームズの姿に好奇心をそそられていた。一体、ホームズはどうしたのだろうか？ まるで何かが起こるのを待っているみたいじゃないか。

その時、窓の外で馬車がとまる音が鋭く響いた。そして、間もなく階段を昇ってくる足音が聞こえてくる。

「来た」

ホームズはつぶやいた。そして、ハドスン夫人が来客が来たことを伝えにやってくるまで時間はかからなかった。

「ホームズさん、御婦人がいらっしやってます。こんな晩に、お一人で」

「わかりました、お通しして下さい」

ハドスン夫人と入れ替わりに入ってきたのは、深いヴェールを顔に下ろし、濃紺の瀟洒なドレスに身を包んだ貴婦人だった。手には革の手袋をはめ、栗色のブーツをぴったりに履き、首筋の白い肌だけが浮き立って見える。

「ようこそ、よくいらっしやいました。でも、ヴェールはあげられた方がよろしいですね、シンクレア卿夫人」

小さな溜息が聞こえ、貴婦人はやや乱暴な手つきで、ヴェールをはねあげた。

「やっぱり、あなたにはかないませんでしたわね。ホームズさん」

カメオ細工のような、レディ・ジェインの顔がテーブルのランプのランプに照らされている。だが、蠟のように青ざめた顔色は、ごまかしようがなかった。

「僕がさしあげた電報に、すぐお答えになってくれたようですね」

「だって、あなたが……わたくしをミイラの手を切り取った犯人だ、と名指して告発なさるんですもの」

「そして、こうしておいになった。そのことが、あなたの犯罪を立証しているんじゃないありませんか？」

私は、呆然としたまま、二人の様子を見ていた。シャーロック・ホームズとシンクレア卿夫人は、睨みあうように黙ったまま、互いの顔を見ている。それにしても、レディ・ジェインとは！ 私は、ホームズが新聞記事を見て「犯人はわかった」と言った時、リチャード・ガードナーだとばかり思っていたのだ。

「あなたは、若返り療法に夢中になっておられた。そんな時、ガードナー博士からミイラに素晴らしい薬効作用があると聞かされ、それを美容に使えないかと思ったのでしよう？」

夫人の答えはなかった。気ぜわしい息づかいだけが聞こえる。

「リチャード・ガードナーは、抜け目のない男です。ミイラの利用価値に気づいたとしても、不思議はない。シンクレア伯爵からミイラを盗み出すことだって、しかねません。でも、それだったら、片手だけというけちくさいことなどせず、堂々と本体全部をかつさらってゆくはずです。それに、シンクレア卿のもとには、ミイラなどよりずっと価値のある秘宝がいくらかもあるのですから、目をつけるとしたらそちらの方でしょう——という訳で、僕の頭には寶石より何より、自分の美貌を保つことに腐心している一人の女性の姿が浮かんだのですよ」

ホームズは、いたわりさえ感じられるような奇妙に優しい調子で続けた。

「それで、ミイラはどこにあるんです？ もう使ってしまいましたか？」

「ここですわ……ほら、バッグの中に入れて持ってきたんです」

シンクレア卿夫人は叫ぶと、手をビロードの手さげバッグにつっこむと、中から何かをひっぱりだした。その土色をした気味の悪いものは、テーブルの上に投げ出されたが、まごうかたなくミイラの手だった。完全に五本の指がついた骨に、がさがさと干からびた皮がこびりついている。墓から、棺の蓋を開けてうごめく、悪鬼の手のような凄みがあった

「こうやって見ると、まるで一流の芸術家を作ったオブジェのような美しさがありますね」

——やはり、ホームズは普通の人間とは違った美的感覚を持っているらしい。

「でも、結局あなたはこれを、薬として摂取することはなかったんですね」

「ええ。リチャードは、素晴らしい霊薬だとか、色々言っていましたけれど。すりつぶして飲むなんてことは、気味悪くてできませんでした」

ホームズは、かすかに微笑した。

「よし、それでいいんです。あなたはこれを棺の中にそっと戻して置きなさい。そして、シンクレア卿に正直に、言うんですね」

「そんなことしたら、あの人、絶対私を許してくれませんわ」

シンクレア卿夫人は、涙声で言った。手が救いを求めるように、バッグの留め金を神経質にいじくりまわしている。

「そんなことはないんじゃないかと思えますよ。まあ、僕を信じて下さい」

「……」

「これにこりて、美容に血道をあげるといふ愚かしいことはやめるんですね。それに……火遊びもです」

ホームズは最後に、ちくりと皮肉をきかすのを忘れなかった。

結局、私たちはシンクレア卿のもとへ報告に行く必要はなかった。レディ・ジェインがやってきた翌々日、ホームズのもとへ卿から電報が届けられたのだ。

「事件、完全に解決した。協力に感謝する。アーサー・シンクレア」

素っ気ない、事務的な文面を眺めながら、ホームズは苦笑した。

「やれやれ。シンクレア伯爵は、僕らが思っていた以上にやり手らしいよ」

「とうとうと？」

「どうやら、彼は最初からミイラを盗んだのは、自分の妻だと知っていたようだ。僕には、ジョン・ラムジーが怪しいなんて言っていたけれどね。おそらく、レディ・ジェインに対する一種のこらしめみたいな意味合いで、僕に捜査を頼んだんじゃないか」

「それじゃあ、レディ・ジェインはどうなっているだろう？ ひどいことになってるん

じゃないか？」

「さあ……。でも、大体シンクレア卿夫人が、あんな妙なことをしたのも、自分を顧みない夫に対する怒りがあってのことじゃないかと思うからね。でも、いいじゃないか、ワトスン。事件は終わったし、素晴らしい秋晴れだ。掃き清められたロンドンの空気を吸いながら、トルコ風呂で午後を過ごすのも悪くないじゃないか？」

レディ・ジェインに心配する必要はないだろう、と言っておきながら無責任なものだ。でも、確かにトルコ風呂で異国風のサービスを受けながら、蒸気の中で全身の汚れを落とすのも悪くはない。私は、帽子を取って立ちあがることにした。

そして、事件は一件落着いたらしい。さらに数日たって、私たちの部屋には素晴らしい深紅の薔薇の花束が届けられたのだ。紫のリボンには、カードが添えられていて、レディらしい優雅な筆跡でこう記されていた。

「シャーロック・ホームズ様、ならびにワトスン様。お二人の深いご親切に感謝して。

ジェイン・シンクレア」

薔薇はその朝切り取られたばかりらしく、花びらには透明な露がついたままでうっとりするような芳香が漂った。が、ホームズはあわてて隣の寝室に飛び込みながら、叫んだ。

「その薔薇を僕に近づけないでくれ。鼻がむずむずするんだ……おい、ワトスンったら。

ハ、ハックション！」

(了)